

## 5. 清熱剤

清熱剤とは、熱証を治療する方剤である。

熱証には大きく分けて実熱証と虚熱証とがある。

実熱証は、おもに病邪が熱に変化した病態である。邪熱が表にあるときは発汗によって解し、裏で実熱が盛んになれば攻下によって瀉熱する。しかし、表で発汗しても熱が除かれられない場合、あるいは裏熱が盛んであっても未だ結実はしていないときは、清熱瀉火の方剤を用いて直接その熱を排除あるいは清解する。

虚熱証は、陰虚によって熱を発する場合で、脱水や栄養不良によって、津液を消耗することで内熱が発生する証である。

清熱剤の投与にあたっては、熱の虚実とともに真仮を見きわめることが大切である。真熱仮寒の証には清熱剤を用いるべきであるが、もし真寒仮熱の証であれば、本態は強い虚寒証なのに外見は逆に熱証のように見えるだけなので、清熱剤は禁忌で逆に温裏補陽剤を投与しなくてはならない。

熱証があれば、一般に舌質は紅色で、脈は数となる。

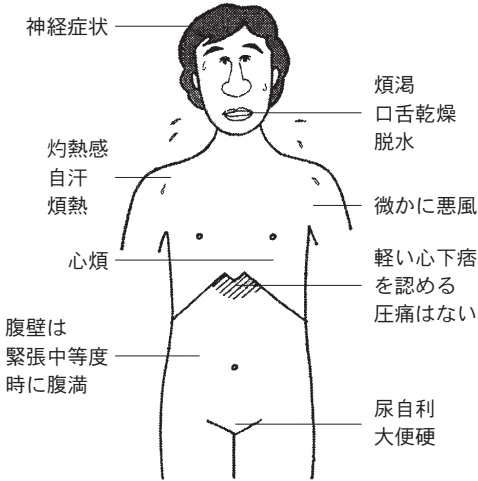
### 清実熱剤

白虎加人参湯、竜胆瀉肝湯、三黄瀉心湯、黄連解毒湯、温清飲、荊芥連翹湯、柴胡清肝湯、桔梗湯、清肺湯、排膿散及湯、辛夷清肺湯、清上防風湯、十味敗毒湯、消風散、治頭瘡一方、乙字湯、立効散、茵陳蒿湯、茵陳五苓散、五淋散、猪苓湯。

### 清虚熱剤

三物黄芩湯、清心蓮子飲。

びゃつこ かにんじんとう  
**白虎加人参湯** (傷寒論・金匱要略)



**方意**

内外とも熱盛で、全身が熱く、発汗して煩渴し、脱水した結果、気と津液も欠乏して、倦怠感と背中に寒けを感じる者は、陽明経の盛熱を治す白虎湯に、益気生津の人参1味を加えた本方で主治する。

臨床の現場では、白虎湯の証より本方証のほうが多く見られる。病位は陽明経病、裏熱実証。

脈は洪大。

舌は乾燥、白苔か黄苔。

**診断のポイント**

- ① 口渇・多汗・尿自利
- ② 脈洪大
- ③ 皮膚灼熱感・脱水・軽い寒気

**原典**

桂枝湯ヲ服シ、大イニ汗出デテ後、大イニ煩渴シテ解セズ、脈洪大ノ者ハ、白虎加人参湯之ヲ主ル。(『傷寒論』太陽病上篇)

傷寒大熱無ク、口燥渴シ、心煩シ、背微カニ悪寒スル者ハ白虎加人参湯之ヲ主ル。(同・太陽病下篇)

傷寒脈浮、発熱無汗ハ、其ノ表解セズ、白虎湯ヲ与ウベカラズ。渴シテ水ヲ飲マント欲シ、表証無キ者ハ白虎加人参湯之ヲ主ル。(同)

太陽ノ中熱ハ、喝是也、汗出デテ悪寒シ身熱シテ渴ス、白虎加人参湯之ヲ主ル。(『金匱要略』痙湿喝病篇)

**処方**

|                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| セッコウ (石膏) …………… 15.0 g | カンゾウ (甘草) …………… 2.0 g |
| チモ (知母) …………… 5.0 g    | コウベイ (粳米) …………… 8.0 g |
| ニンジン (人参) …………… 3.0 g  |                       |